

## 「一書の人 ―ジョン・ウェスレーを覚えて―」

### マタイによる福音書 4章1～4節

聖学院大学 大学チャプレン・政治経済学部チャプレン 菊地 順

このチャペルが建てられて、この秋でちょうど10年になります。そのことを覚えて、先週から、今年度のシリーズ説教「神の言葉に生きる―チャペル献堂10周年を覚えて―」が始まりました。今週は、その2週目ですが、今日は「一書の人」という題でお話したいと思います。この「一書の人」という言葉は、わたしが作り出したものではなく、18世紀にイギリスで活躍したジョン・ウェスレーという人が用いた言葉です。ジョン・ウェスレーは、弟や友人たちと共に、メソジストと呼ばれるキリスト教の一つのグループを作った人で、それは、日本では青山学院大学などの背景になっているグループです。

ジョン・ウェスレーは、1703年、イギリスのリンカーン州にあるエプワースという町で生まれました。今から300年以上前の話です。お父さんはサムエル・ウェスレーと言い、プロテスタント教会の牧師をしていました。また、お母さんはスザンナ・ウェスレーと言い、非常に勉強好きで教育に熱心な母親でした。スザンナは19人の子供を産みましたが、ウェスレーはその15番目の子として生まれています。しかし、先に生まれた14人のうち、8人は幼くして亡くなってしまいました。当時は、子供の死亡率が高かったので、子供をたくさん産んだ時代であったのです。

ところで、ウェスレーは、幼年時代、一つの忘れられない体験をしています。それは、牧師館が火事になり、そこから奇跡的に救い出されたという体験です。牧師館とは、教会に付随している、牧師一家が住んでいる家ですが、ウェスレーが5歳のとき、その家から火が出たのです。そして、火は瞬間に燃え広がり、2階で寝ていたウェスレーは取り残されてしまいました。しかし、そこに駆けつけた2人の男性によって、家が崩落する直前に、奇跡的に助け出されたのです。そのとき、子供は全部で8人いましたが、その全員が助かったのです。両親は、当然のこと、このことを深く神に感謝しました。そしてまた、ウェスレーも、この経験をとおして、自分には神から特別の使命が与えられているのではないかと考えるようになったのです。おそらく、この経験が、後のウェスレーの活動に重要な影響を与えたのではないかと思います。

しかし、ウェスレーの人生は、順風満帆とは行きませんでした。むしろ、多くの挫折を経験しながら形成されていった人生であったとも言えるように思います。一つの大きな転機が訪れたのは、オックスフォード大学を卒業したあと、再びそこに戻った時でした。オックスフォード大学は、父も祖父も卒業した大学で、5歳年下の弟のチャールズも、ここに通っていました。そこで、新しいグループが作られていくことになったのです。それは、初め、弟のチャールズたちが始めました。それは、キリスト者の集いで、聖書を学びながら、その教えを社会的に実践するというもので、時には監獄などにも出かけて行って聖書の話をしたりしました。集まっていた学生たちは、皆非常に熱心で、また真面目でした。そこでつけられた渾名が、「メソジスト」という名であったのです。自分たちでは、「ホーリークラブ(神聖なクラブ)」と名乗っていましたが、つけられた渾名は「メソジスト」という名であったのです。それは、<生真

面目な人たち」といった意味で、その真面目さを揶揄した名前でした。しかし、皮肉なことに、この名前が、後に、このグループの正式の名称になったのです。

ウェスレーは、初めはこの会に関わってはいませんでした。再び大学に戻って学ぶことになったとき、この会を指導することになります。そして、ウェスレーは、精神的指導者として力を発揮しただけではなく、また組織を形成することにおいても、大いに力を発揮しました。そして、このグループを成長させていったのです。しかし、先ほども触れましたように、その歩みは、決して順風満帆ではありませんでした。それは、特に、アメリカのジョージア州に渡って伝道をしたとき、大きな挫折となって現われました。今、聖学院大学は、ジョージア州の州都アトランタにあるオグルソープ大学と提携を結んでいますが、このオグルソープという名前は、この地を最初に統治したイギリスの将軍オグルソープの名前から取られたものです。実は、このオグルソープ将軍が、この地を統治するためにジョージアに行ったとき、オグルソープ将軍の友人であった父親の計らいで、ウェスレーも、弟のチャールズと共に、ジョージアに行くことになったのです。それは、新天地での伝道という、希望に満ちた船出でありました。しかし、実際のジョージアでの働きは、思うようには行きませんでした。思うように行かないどころか、ある婦人のことで教会と対立し、裁判に訴えられ、2年余りで帰国せざるを得なかったのです。このことは、ウェスレーに大きな挫折感と心の傷を残しました。ウェスレーは、そのときの心境を、おおよそ次のように語っています。「私は『神の栄光にまで届いていない』し、私の心はすみずみまで『全く汚れていて、忌まわしい』。したがって、私の全生活がそうなのである。私は、神の命から『遠ざか』っているが故に、私は『怒りの子』であり、地獄の相続人である」。ウェスレーは、自分は「地獄の相続人である」と思うほどに、深く打ちのめされたのです。

しかし、ウェスレーは、このとき、ある出会いをとおして、この深い挫折の中から立ち上がることができました。それは、ドイツを中心に活動していた、モラヴィア兄弟団の人たちとの出会いでありました。この人たちのことを、ここで説明する時間はありませんが、そうした出会いをとおして、ウェスレーは「第二の回心」を経験することになったのです。ウェスレーは、神に完全に心を向けるという回心をすでに経験し、またそれゆえに牧師になっていましたが、改めて、その回心を経験することになったのです。そして、身も心も新たにされて、メソジストの牧師として、伝道と組織の育成に励んでいくことになりました。そして、87歳の生涯を終えるまで、イギリスの各地をあまねく回り、キリストの福音を宣べ伝えたのです。

ウェスレーは、あまり多くの本は残しませんでした。その代り膨大な日記を残しました。この日記が、ウェスレーの主著だと言ってもいいと思います。しかし、何冊か書かれた本の中に、ウェスレーの思想全般を語る重要な書物があります。それは、『キリスト者の完全』という本です。これは1766年、ウェスレーが63歳の時に出版された本ですが、この本の中でウェスレーは、今日の奨励題にした「一書の人」ということを語っています。すなわち、ウェスレーは、私は、「とくに1730年以後」、「他書を顧みないで、『一書の人』—すなわち聖書だけの人になり始めた」と語っています<sup>ii)</sup>。「一書の人」、英語で言えば「a man of one book」、ラテン語で言えば「homo unius libri」という言葉です。1730年というのは、ウェスレーがオックスフォード大学に戻り、ホーリークラブを指導するようになった時期です。その時から、ウェスレーは、「一書の人」、「聖書だけの人」になることを志したというのです。それは、聖書以外の書物は読まないということではありません。実際には、ウェスレーは非常に多くの、聖書以外の本を

読んだ人です。そして、その習慣は、晩年まで続きました。昔の移動手段は馬でしたが、ウェスレーは馬に乗ってイギリス中を伝道旅行するとき、しばしば手綱を放して、本を読んだと言われています。また晩年になってからは、馬車に乗るようになりましたが、馬車の中には本棚があって、馬車に乗っている間は、いつも読書をしていたそうです。しかし、そうではあっても、ウェスレーは「一書の人」であったのです。それは、読書の中心が聖書にあったのみならず、生活のすべての基準が聖書であったのです。ウェスレーは神に生きる者として、「完全」を求めましたが、それは聖書に従う生き方であったのです。聖書の言葉を、その生活そのものにしようとしたのです。なぜなら、聖書の言葉こそ、人を真実に生かすものであることを教えられたからです。

先ほど、司会者の先生に読んでいただいた、マタイによる福音書4章4節で、主イエスは、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という旧約聖書の言葉を語られています。それはまた、主イエスご自身が深く確信し、そしてご自身の生き方とされていた言葉でもあります。主イエスは、人は、生きるためにはパンも必要であるが、それと同時に、そして、時にはそれ以上に、神の口から出る神の言葉を聞くことが大切であると語られたのです。それは、人は肉体において生きるだけでなく、精神においても生きているからです。そして、精神は、神の言葉を必要としているのです。永遠の神の言葉なくして、永遠を希求して生きている精神は、養いを得ることはできないからです。そのことを、主イエスご自身、深く自覚され、旧約聖書の言葉をいつも深く味わわれていたのです。その意味では、主イエスご自身こそ、正に「一書の人」であったとも言えるのです。ウェスレーは、その主イエスに倣ったのです。わたしも昔、この「一書の人」という言葉に出会ったとき、その時使っていた聖書の扉に、ラテン語の「homo unius libri」という言葉を記しました。それ以来、この言葉は、わたしの大事な標語になっています。わたしは、皆さんたちにも、是非この言葉を知っていただきたいと思い、今日お話ししました。それは、わたしたち一人ひとりが、永遠の神の言葉に耳を傾け、その言葉によって、真実の命に生きる者となって行きたいと思うからです。そして、その思いを、チャペル献堂10周年を迎える今、皆さんと共に、新たにしたいと思うのです。

2014年10月21日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)

---

<sup>i</sup> 茂呂芳男『ウェスレー』清水書院、135－136 頁

<sup>ii</sup> J. ウェスレー、山口徳夫訳『キリスト者の完全』キリスト新聞社、25 頁